

発行：熊谷市立江南文化財センター

新年明けましておめでとうございます。
本年もよろしくお願い申し上げます。



下恩田ささら獅子舞（市指定無形民俗文化財）：五穀豊穡・病魔退散祈願

TOPICS

第 2 回地域伝統芸能今昔物語

11月29日（日）、「第2回地域伝統芸能今昔物語」が江南総合文化会館ピピアで開催され、市内各地に保存継承されてきた市指定無形民俗文化財 8 団体（上川原神道香取流棒術、東別府祭囃子、池上獅子舞、地藏尊御詠歌、下恩田ささら獅子舞、手島八木節笠踊り、須賀広ササヲ獅子舞、板井屋台囃子）と、地域に根ざし広められた芸能 6 団体（熊谷市民謡民舞連合会、箏曲雅会、沖縄舞踊愛好会、妻沼八木節保存会、民謡音秀会、むさし江南音頭保存会）が共演し、伝統芸能の素晴らしさや奥深さを多くの来場者に披露しました。また、同会場にて無形民俗文化財のパネル展示も行いました。イベントの様子は、NHK のニュースで紹介されました。



板井屋台囃子

特別展示—諏訪木遺跡 飯塚・飯塚南遺跡



諏訪木遺跡展示（文化財センター）

文化財センターでは、常設展に加え諏訪木遺跡（上之地区）の遺物を展示しています。諏訪木遺跡は、熊谷扇状地の末端にあって、幅広い時代の遺跡が重複しています。今回の展示は、多量に出土している木製品のうち保存処理が終了したものを中心に、市指定となっている遺物を展示し、諏訪木遺跡の遺物の内容の豊かさ、平安時代の祭祀の形態を見ていただけたらいいと思います。

加えて、熊谷図書館に設置されている文化財センター特別展示スペースでは、今までの一本木前遺跡に替わって、飯塚・飯塚南両遺跡（妻沼・飯塚地区）の遺物を展示しています。両遺跡は利根川の乱流地帯に形成された自然堤防上において、当地で米作りの開始された時期、弥生時代中期前半の再葬墓のあり方を良く示しています。

特集 1 江南文化財センターとは

平成 19 年、「ふれる・知る・作る」を基本コンセプトとし、旧江南地域に関係のある埋蔵文化財を中心にその収蔵と活用の場として設置されました。新熊谷市の誕生後は新市の文化財保護拠点として市域に所在する建築物や民俗行事などの指定文化財を保護する仕事や、その保護のための情報発信と啓発活動にさまざまな場面で取り組んでいます。



文化財センター展示室



なかでも、土の中に埋まっていた埋蔵文化財を保護する仕事は主要な事業のひとつとなっており、継続的に「市内遺跡発掘調査」を実施し、土器や埴輪などの多くの出土品を発見しています。この発掘調査結果を公開できるようにする整理・報告作業をセンターで実際に行っています。また、整理後の出土品をセンター展示室でいち早く公開し、見学の間と最新の発信情報を提供しています。

市内遺跡発掘情報

前中西遺跡「またまた弥生時代の竪穴住居跡多数発見！」

市内上之の前中西遺跡では、区画整理事業に伴い、平成8年度から発掘調査が行われており、今年度は創刊号でお伝えした第1次調査（6月～10月）に続いて第2次調査を11月から1月にかけて実施しました。

今回の調査でも第1次調査と同じく遺跡の主体となる弥生時代の集落跡（竪穴住居跡7軒）が見つかりました。住居跡からは大量の弥生土器の壺（つぼ）・甕（かめ）や打製石斧（だせいせきこ、土を掘るための石器）などが出土し、その他にも石で作られた長さ3～4cm程の鎌（やじり）なども出土しました。

今回の調査地点は、第1次調査地点とは約400m離れていることから前中西遺跡における弥生時代の集落跡は、大規模かつ広範囲にわたって営まれていたことが明らかになりました。



弥生時代の竪穴住居跡から出土した石の鎌（やじり）

西別府館跡「古代の住居跡とお墓」

9月から10月にかけて、西別府で個人住宅建設に伴う緊急調査を実施しました。西別府館跡は、平安時代末から中世にかけての別府氏の館跡と伝えられている遺跡ですが、今までの調査では、奈良・平安時代の集落跡や中世の火葬跡が発見されているだけで、館跡に直接関係するものは確認されていません。

今回の調査では、奈良・平安時代（8世紀後半～10世紀初頭）の竪穴住居跡3軒、平安時代（9世紀末前後）の土坑墓1基などが発見されました。奈良時代の住居跡のカマドからは、近くにあった西別府廃寺に使われたと考えられる瓦が出土しましたので、このお寺と何らかの関係がある人たちの住居の可能性が考えられます。

また、住居のすぐそばでは、土坑墓という長さ約190cm、幅約45cmと小さなお墓が確認されました。骨などは確認されませんでした。副葬品として須恵器埴が2点、灰釉陶器埴が1点出土しました。



土坑墓



竪穴住居跡遺物出土状況

連載 埋蔵文化財の保護活動

第2章 試掘調査の方法①

試掘調査は、主に開発が予定された場所で行っています。これは地下にある遺跡の有無・深さ等を確認するためです。ショベルカーを使用して、1m程度の幅で溝（トレンチ）を掘りますが、深さは地点によって大きく異なります。

現在の熊谷市は地形的に見ると、主に「台地」と「低地」に分けられます。台地は市域西部に広がる「楡引台地」と南部の「江南台地」があります。低地は福川より北の「妻沼低地」と福川より南の「熊谷低地」に分かれます。台地上では浅く、低地では深く遺跡が埋没している傾向があります。これは、昔から低地では河川による氾濫が度々起こり、その結果厚く埋没してしまうからです。台地上では「関東ローム層」と呼ばれる黄褐色の粘質土が見られますが、この層で遺跡の有無は判断できます。（つづく）

試掘調査の様子



溝（トレンチ）を掘る



遺構の検出



遺構の確認

文化財センター事業報告

県民の日イベント

埼玉県民の日である11月14日(土)、市内各所において文化財関連のイベントを開催しました。文化財センターでのまが玉づくり体験、妻沼聖天山軟喜院での修理工事現場見学会の他、名勝星溪園では、熊谷女子高校および熊谷西高校の茶道部、立正大学裏千家茶道部のご協力を得て、お茶に親しむ会を開催しました。児童生徒をはじめ来場された多くの方たちは、普段では体験する機会の少ない「お茶」をしつくりと味わい、楽しんでいました。



星溪園でのお茶体験

市指定文化財調査—柴田家書院・上新田諏訪神社

12月に市指定文化財である柴田家書院と上新田諏訪神社の現況調査を実施しました(いずれも江南・上新田地区)。柴田家書院は同家の母屋とは別棟に景石・銘木を配した庭園とともに江戸時代中期に建築されたとされ、床と書棚を配した十畳の上段の間を中心に控えの間、廊下が配されています。構造、屋根などの多くは創建時のままであると考えられます。なお、当初の棟札が保存されていることが確認され、建築年〔安永3年(1774)〕や大工等の関係者を知ることができたことが大きな発見でありました。

諏訪神社は、上新田地区の鎮守神の本殿であります。隙間なく立体的な彫刻が配され、彩色が施されています。従前から知られる棟札銘から江戸時代中期〔延享3年(1746)〕の創建、後期の再建〔嘉永5年(1852)〕とされ、妻沼地区の聖天堂の建立にかかわった大工・彫り師の関与が知られてきました。現状では構造体のゆがみが窺え、部材の落下や色彩の剥離が目立っています。なお今回の調査で本殿棟木に創建時の墨書銘を発見したことは大きな成果でありました。



左：柴田家書院彫刻 右：諏訪神社本殿正面

星溪園「玉の池」水深調査

12月、名勝星溪園の回遊式庭園の中心にある「玉の池」の水深調査を行いました。これは市指定文化財の現状を把握するとともに、今後予定している水循環ポンプ改修に向けての水深確認を目的として、シュノーケリングの方法を用いて実施したものです。これにより、池全体における深い箇所と浅い箇所の位置と分布を把握することができました。池の北側では約1m、池の中央部および南側では約1.6mの深さに達することが分かりました。また、池底には土砂の堆積があり、水中の透明度もきめて、かつて湧水により豊富な水量が維持されていた頃とは異なる状況が分かりました。



文化財探訪 宮塚古墳—全国的にも珍しい古墳



宮塚古墳は、市内中央部広瀬地区内に所在し、全国的にも珍しい上円下方墳という墳形をもち、昭和31年に国指定史跡として指定されました。

上円下方墳とは、方形の段の上に饅頭のような円形の土盛りがのる特異な形で、県内の例では川越市に山王塚古墳があります。また、全国に目を向けてみると、天皇家や有力豪族たちが採用した墳形で、奈良県の石のカラト古墳、静岡県清水柳北1号墳、東京都の熊野神社古墳・天文台構内古墳、福島県の野地久保古墳があります。宮塚古墳を含めた埼玉県内の2例については、発掘調査が行われておらず墳形を確認していません。

さて、宮塚古墳は、荒川左岸の自然堤防上に立地する広瀬古墳群中にあり、上円部が直径約10m、下方部が西辺2.4m、東辺1.7mで、高さ4.15mです。築造の時期は、7世紀末頃(今から1300年くらい前の古墳時代の終わりごろ)と考えられます。埋葬施設は、横穴式石室とすればかなり小さなものと考えられますし、もしかしたら火葬した骨を納める容器や箱のような部屋があったのかも知れません。残念ながら、埋葬施設も調査されていませんので、詳しいことは分かっていません。



のどかにうぐいすの鳴き声を聞きながら、熊谷・小川県道を南下し、もう嵐山町に入る直前の、和田川を越えた熊谷市南端の丘陵を上りきった尾根上に塩古墳群があります。

平成5年冬、発掘作業員が木の根の絡む墳丘の角隅を力を入れて掘っています。そして、「この線が直角に出ればな〜」という調査員の言葉が聞こえたかのように、墳丘西隅が直角に折れて出てきたのです。前方後円墳といわれていた塩古墳群1支群1号墳が、実は全長35.3mの前方後方墳であることが決定的となった瞬間です。前方後方墳と前方後円墳、1字しか違いませんが、歴史的にはすごく大きな違いがあります。

1号墳は、最初から前方後方墳として分かっていただけではありません。その形をめぐっては、古墳の研究の過程と合わせ

たように変化しています。昭和35年、前方後円墳と認識されていた1号墳と2号墳を主に、他の円墳とともに総数23基が古墳時代後期における群集墳として埼玉県の史跡に指定されました。当時は、前方後方墳という認識は薄いものでした。しかし、研究者の間から1号墳と2号墳について「後円部が丸でなく四角い形をしているのではないか」という疑問が出され、その後の測量精度の高まりと共に、各辺が直線的になる「前方後方墳」の可能性が高くなってきました。そして平成5年、発掘調査でこれが確認されたのでした。この時点で周囲にあった円墳も方墳であることが分がり、さらに塩古墳群が、当地で最も古い古墳時代前期の古墳群であることが判明したのです。

特集2 熊谷市 web 博物館とは

現在、世界ならびに日本各地で、実際に存在する博物館・美術館とは異なる「ミュージアム」として、資料のアーカイブ（記録保存）やネット上での幅広い公開などを目的としたデジタルミュージアムが相次いで設立されています。

江南文化財センターが、ホームページ「熊谷市の文化財」とともに開設し運営している「熊谷市 web 博物館」は、そのようなデジタルミュージアム構築に向けた大きな可能性を持っています。

今後、熊谷市全体における文化財データの収集を行い、文化財の画像や動画をサイト内で紹介するなど、内容の充実を図っていく予定です。web 博物館を通して、熊谷市の文化財や文化財保護事業をより多くの方たちに紹介し、発信することを目指し、多岐にわたる文化財の調査の充実化を図ってまいります。



熊谷市 web 博物館のサイト

URL: <http://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/index.htm>

編集後記

前回の創刊号に続く第2号は、平成22年の新春号として発行いたしました。文化財は、人類の長い歴史の中で築かれてきた文化や営まれてきた生活の証（あかし）であります。文化財センターでは、これらを未来に引き継ぐために、文化財保護事業を進めています。本情報誌を通じて、さらに文化財保護の輪が大きく広がりますことを祈っております。

なお、「市報くまがや」1月号に江南文化財センターの特集記事が掲載されています（28～29頁）。こちらもあわせてご覧ください。



発行：平成22年1月20日

熊谷市立江南文化財センター（熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係）

〒360-0107 熊谷市千代329番地

電話 048-536-5062 FAX 048-536-4575

メール c-bunkazai@city.kumagaya.lg.jp

ホームページ：文化財概要、埋蔵文化財の取扱方法、「BUNKAZAI 情報」カラー版などを豊富に掲載

「熊谷市の文化財」<http://www.kumagaya-bunkazai.jp/>

「熊谷市 web 博物館」<http://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/index.htm>